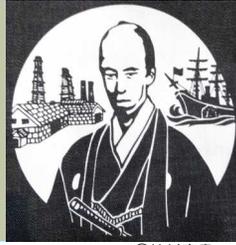


# 小栗上野介情報68



©竹村育貴

ホームページ <http://tozenzi.cside.com/> Eメール: [sharmila@theia.ocn.ne.jp](mailto:sharmila@theia.ocn.ne.jp)

2017 (平成29) 年 6 月

発行 東善寺住職 村上泰賢

ごんだ

群馬県高崎市倉渕町権田169

〒: 370-3401

TEL & fax: 027-378-2230

振替 00120-1-406206 東善寺

# 小栗まつり

## 150回忌

主催: 小栗上野介顕彰会 共催: 東善寺

会場: 倉渕小学校・東善寺 写真: 大井寅之助

5月21日(日)、ボタンが咲く境内と倉渕小学校で小栗まつりが行われた

### ■倉渕小学校で 午前10時~

**式典** 式辞 市川平治会長、祝辞 兵藤公保高崎副市長・沼田芳明横須賀副市長、来賓紹介など / 演奏 倉渕中学校音楽部

**講演** 「小栗上野介と中小坂鉄山」東京国際大学講師 原田喬

### ■東善寺で 午後1時~

**墓前祭** 小栗上野介父子と家臣並びに村人150回忌追悼の墓前祭

追悼の辞 深井紘副会長、法語・読経 献香 大勢の方がお線香を供えて参拝した

**実演** たたら製鉄 午前8時すぎ点火~午後2時30分取り出し

**昼市** 午前11時~

**実演** 午前8時点火~ 砂鉄を集め「たたら製鉄」で実際に鉄を造った



### 講演「小栗上野介と中小坂鉄山」 原田 喬 ▶

慶応元年五月、間もなく横須賀製鉄所が着工になるのを踏まえ小栗公は中小坂鉄山(下仁田町)の開発を建議した。掘る寸前まで進んだ計画は幕府解散で後に明治政府に引き継がれ、実際に溶鉱炉で鉄が生産され、さらに現地で製品まで作られた。その銑鉄は日本で初めてヨーロッパの水準に達していたことが、最近の研究でわかった一と語った。



### 実演 「たたら製鉄」



▲墓前祭で献香する参加者

## 墓前祭

◇小栗上野介父子と家臣、それに殉難の村人などが150回忌を迎え、供養の墓前祭。近年明治維新や幕末の歴史に関心を寄せる人が多く、たくさんの参拝者が列を作って墓参し献香した。  
◇かつて、父子の首級の行方について各地で「ここに埋めてある」という論争があったが、このほど権田村の農民が館林から盗掘した際の古文書の写しが数点見つかリ、権田村説を確実に裏付けている。この写しは間もなく発行される小栗上野介顕彰会機関誌『たつなみ』42号に掲載の予定。



ケラ ▶ 取り出した

▲永田和宏名誉教授 砂鉄を木炭で溶かして鉄を作る古来の「たたら製鉄」を、耐火レンガの簡易な炉で行う方式を考案した東工大永田和宏名誉教授が村下(むらげ・指揮者)となって、倉渕小の児童が集めた砂鉄を中心に実演。午前8時すぎに点火し、1500度の高温で砂鉄を熔解、午後2時すぎに火を止めてケラを引き出し、水で冷やして塊になった鉄を取り出した。

◆東善寺所蔵の 火縄銃に「小栗又一 忠高造」の銘 があった

当寺所蔵の小栗家家紋付きの火縄銃の金属銃身に、「小栗又一 忠高造」という銘が刻まれていることが判明した。小栗忠順の父忠高が自ら銃を鍛えていたことになる。

このことから

- ・旗本が自ら銃身を鍛えていたことは珍しい
- ・駿河台の小栗邸屋敷内に作事場を設けていたのではないか
- ・息子忠順が砲の研究をしていたこともその影響と思われる
- ・探究心が強く、現場をきちんと抑えて提議し実行するリアリスト小栗忠順の性格は、父親譲りのものと言えるのではないかと推測できる。



◀ 小栗又一 忠高造 の銘が小栗家家紋の裏側に

小栗忠高は一

【 】は忠順の年齢

- ・小栗家11代忠高は江戸駿河台の旗本中川飛騨守忠英（ただてる）の四男。文化六年（1809）一月三日生れ。幼名は堅固。
- ・文化十年（1813）七月、小栗忠清が病気となったので、家名断絶を恐れた小栗家に五歳で養子となり、忠清の娘クニ（邦子）の婿となる。
- ・七月二十八日、忠清は二十二歳で病死。
- ・文政九年（1826）十八歳。御小姓組に御番入り、天保十三年（1842）三月将軍家慶の白書院広縁での剣術御覧に上覧を得る。四月、乗馬を上覧。
- ・弘化四年（1847）十月、持筒頭。三十九歳【21】
- ・嘉永七年（1854）九月、新潟奉行として赴任。四十六歳【28】
- ・翌安政二年（1856）七月、新潟において四十七歳で病没。新潟市法音寺に葬る。【29】
- ・長男忠順（ひとり）、長女貞子は忠順が八歳の時早世。

▼銃身を外したところ



◇銘を見つけた峯田元治氏（上尾市）は6月10日（土）日本銃砲史学会例会（早稲田大学各務記念材料技術研究所）で「旗本が銃身を造ったという銘は見たことがない」「銃は田付流の型」「幕府の持筒頭を勤めたことに関連しているのではないかと研究発表した。

◆観音山の杉伐採ですばらしい展望

小栗上野介が居宅を建設しかけた観音山を管理する共有林組合が邸址周辺の杉を伐採し、広々としたすばらしい展望が開けた。

烏川対岸の川浦・岩氷一帯からはるかに浅間隠山（1757m）を見渡せる邸址周辺には、小栗公が江戸から運んだお茶の株が残



▲丘の上から浅間隠山がのぞめる

り、小栗公が当時の輸出品であるお茶と生糸の生産で生計を回らうとしていたことがうかがえる。邸址周辺はこれから桜などを植えて公園化を図る構想が練られている。

◆「怒涛のごとく」小栗上野介の生涯をたどる朗読と音楽

脚本・作曲：遠藤徹二、朗読：葛村聡子 ヴァイオリン・クラリネット・ピアノによって小栗上野介の生涯が語られました。

- ・期日：5月26日（金）
- ・会場：ティアラこうとう（江東区公会堂小ホール）

◆5月10日付 読売新聞で小栗上野介埋蔵金コラム

日本史家の磯田道史氏はコラム『古今をちこち』の「油酒樽に詰まった埋蔵金」で、最近入手した古文書『風聞記』を紹介。

小栗上野介の権田村隠棲前後の風聞を書き記した中に「上様之御更筋（おかえのすじ・將軍の更迭）」を申し立て…「蚕種生糸等に限らず諸運上（税）を取り上げ、上へ納めずして、みな己が私欲に致し、凡そ金七十あるという。「よって国元へ油酒樽等に式分金にて相送った」よしである。…（略）…

この際、小栗が築城の噂が出るほどの大工事を行なった可能性がある。それは地元で語られるように単なる用水工事だったのだろうか。と紹介している。

風聞書は尾ひれのついた噂が書き留められ検証なしに読んで危険なシロモノ。それをナマの形で大新聞に書いてしまうのはいただけない。磯田氏は「この史料は小栗の真実そのものではない。当時の人々が小栗をどう見ていたのかがわかる史料」としているが、当時の人々の見方以上に小栗上野介を講談の悪代官のような人物像に描いているところを見ると、殺した西軍側の悪意の宣伝を受けて書いていると思われるフシがある。

日本史家ならまず地元の現場に来てひとまがいで越えられる観音山用水を見ていれば、「大工事を行なった可能性がある」「単なる用水工事だったのだろうか」などと思わせぶりの推測を書かなくてすんだものを一。

◇幕末の歴史・小栗上野介ファンの方へ

□会費 年1300円

会員になって下さい——— 東善寺 たつなみ会

倉渚町の小栗上野介顕彰会は地域の人口減で会員が減っています。東善寺の「たつなみ会」会員には、顕彰会機関誌『たつなみ』を発行のつど顕彰会から購入してお送りし機関誌代が顕彰会の活動資金に役立っています。また東善寺発行「小栗上野介情報」「東善寺だより」などで、小栗上野介・幕末関連の最新情報をお送りします。

□お申し込みは：東善寺へメールまたは電話、ハガキで □ご送金は：郵便振替「東京00120-1-406206東善寺」へ